



株式会社クロスメディア

代表取締役社長 吾妻透氏

「機械に着せる服を作った 「機械に着せる服を作るメーカー」



代表取締役社長 吾妻透氏

取材・構成 ● 西原勝洋
経済評論家

簡単に言うと「機械に着せる服を作るメーカー」だ。見栄えを良くするためではない。無駄な放熱を抑えたり、逆に高温から機械を守ったり、省エネのためだ。まだまだ製品そのものが知られていないから、発展可能性は充分。相模原市にある株式会社クロスメディアは、小惑星検査機「はやぶさ」にも納品している。



コンピュータ関連企業が 大変身して

クロスメディアと言ったら、コンピュータ関連用語であり、PR業界では、様々な表現媒体（メディア）を駆使して伝達（宣伝）効果を極大化させることを言う。

コンピュータ関連業界ではないし、PR業界でもないのに、なぜ「クロスメディア」という社名なのか。

実はコンピュータ関連の会社だったのだ。1985年の創業で、携帯電話の販売、アプリケーションの販売、さ

らには広告代理事業も手掛けていた。が、良かったのは創業当初だけ。次々と参入者が現れ、やがて立ち行かなくなつた。そこで1987年に思い切つた業種転換をした。

相模原市でも、この地域は昔から縫製業が盛んだつた。近くにガラス繊維のメーカーがある。社員を入れ替え、ガラス繊維を内用材にした「機械に着せる服を作るメーカー」に変身したのだ。

社長は創業者から、資本提携先企業の社長、それから雇われ社長へと変わった。現在の4代目社長の吾妻透氏は、コンピュータ関連の企業にいた。

それで、やはりコンピュータ関連企業だった当時のクロスメディアに何回か足を運んだことがあつた。

実は2代目社長の夫人が吾妻社長の姉に当たる。そんな関係で、「機械に

着せる服を作るメーカー」に変わつてからも、1、2度、覗いたことがあるが、社長になるとは考えてもいなかった。

しかし、雇われ社長の下の経営は順調ではなかつた。そして定年を前にした吾妻氏に「クロスメディアを任せたいが、どうか」との話が来た。

2代目社長（義兄）の持ち株を買取り取るのがセットだから、定年を前にしたサラリーマンにしては大変な決断だった。

大学新卒を採用して 活気が

引き受けることを決め、社長として中に入ってみると、「お客さん」の立場で見えていたのとは全く違った。

「これは会社じゃない」「企業の体を成していない」と思った。

しばらく観察すると理由が分かつた。何人かの「ぐうたら社員」がいて、会社全体の士気を著しく落としていた。それで生産性が低いので、経営は火の車。従つて、社員の待遇は「悲惨な状態」に据え置かれ、それがますます社内での士気を落としていた。

「その社員には粘り強く説得して、お引き取り願いました」

吾妻氏は多くを語らないが、これはよほど心労がかさむ「説得作業」だったに違いない。

「ぐうたら社員」を整理したところで、吾妻社長は無理をして社員の待遇を改善した。

2005年ごろから、熱源を使うメーカーとの間で、「簡単に装着できる機械に着せる服がある」という話が広がり始めた。引き合いが増え、見違えるような規律ある社内になり、業績はグングン上がった。

吾妻社長は「社員の待遇は上場企業と同等を目指す」と言う。それで大卒新卒者の採用にも成功した。「この人手不足の時代に、小さな地方企業に新卒が来るものか」と周囲から冷やかされた。が結果は、「就職するなら地元企業」という若者がいるのです。毎年、新卒者が入ってくることに、職場は活気が高まるのです」となつた。

背後には日本でしか
できない縫製加工技術が

クロスメディアが作る「機械に着せる服」とは、どんなものなのか。

最も一般的なものは、ボイラーなどの熱源から伸びているパイプに被せるカバーだ。パイプに、これを被せることで無駄な領域での放熱を抑えられ

る。ボイラーの熱効率を高められるだけではない。パイプ近くに作業場がある場合は、作業場の冷房費も節約できる。

依然として、ガラス繊維を入れたシルーバーホイルを巻き付けたパイプが多い。しかし、この方式だと、弁の部分を点検するだけでも、すべて撤去して、再施工となる。しかも、その作業

をする板金工は極端な人手不足状態にある。

パイプ用に比べると、弁の部分は加工製作が難しいが、クロスメディアはそこを得意としている。

クロスメディアが作る「機械に着せる服」(製品名はファインジジャケット)は、内部は特殊なガラス繊維、表面材と裏面材はガラスシリコンクロスで、

特殊な耐熱マジックファスナーで装着する。だから、点検の時は簡単に取り外せ、また簡単に装着できる。

ファインジジャケットは、無駄な放熱を防ぐ省エネ効果だけではない。

内用材を変えることで、遮熱(作業場での熱中症対策、火傷防止)、遮音(防音対策)、保温(凍結や結露の防止)、安全対策(衝突時の破損防止)など、さまざまな効果を発揮する。

裏面材と断熱材、そして縫合用の糸を変えることで、包み込む対象の表面温度はマイナス20度から900度まで対応できる。

食品・化学など熱源が必須のメーカー、地下ショッピング街などが大口の需要先だ。建設重機のマフラーカバーにも必需品になった。

さらに上質のスーパーファインジジャケットを採用する工場も増えている。表面材、内面材、縫製用の糸もPTF

E(フッ化炭素樹脂)を使用し、耐薬品性・耐油性・耐水性がアップしている。

約25年前年には、小惑星検査機「はやぶさ」の内部機器を保護する特殊なカバーの縫製加工の仕事が飛び込んできた。太陽に面した側は200度にもなり、逆の側はマイナスだ。その環境から、電子機器類を守り抜く特殊なカバー材の縫製加工だ。

そもそも腕のいい裁断・縫製のプロが集まった職場だ。特殊なカバー材を造った大手メーカーは、「誤差ゼロ」を達成できるところはないかと探し回り、クロスメディアにたどり着いたのだ。

この作業は、特設した防塵クリーンルームの中で行う。国家プロジェクトだから、ほとんど利益は出ない。

「しかし、名誉なことであり、社内の士気も高まる」と吾妻社長は言う。

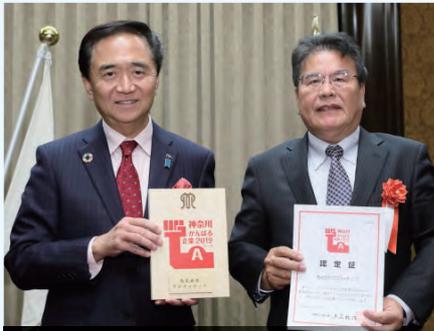
海外に進出した日本企業の工場からも引き合いがある。それで吾妻社長も海外での製造を考えたこともある。

縫製加工といえば、真っ先に人件費の安い海外に逃げ出した産業でもある。しかし「同じ工業用ミシンを使っているにしても、誤差のない緻密な仕上げは日本でしかできない」と見極めた。

工業ミシンを使いこなすプロになるには最低3年かかるとされるが、吾妻



下九沢工場の内部



黒岩知事より「がんばる中小企業」の認定を受ける



当社の主力製品「ファインジジャケット」



はやぶさなどに使用しているMLI



MLI(多層断熱材)の縫製加工



クロスメディア本社



営業活動(展示会にて)



本社の内部

社長は「うちは、みんなベテランのプ
ロばかりだから、いまは製造効率が良
すぎるほどです。だから私の仕事は従
業員の待遇改善を進めることです」と
いう。

2019年は神奈川県「がんばる
企業エース10社」にも認定された。

産業用ロボットも 服を着ると長持ちする

そうした中で新たな部門として期待
されるのは、工業用のロボットに着せ
る服(ロボット・プロテクター)の製
造だ。

ロボットは過酷な条件下で稼働して
いる。人間と違って「つらい」とも「痛
い」とも言わないから、当たり前によ
うに壊れるまで使ってしまう。

しかし、ロボット・プロテクターを
付けることで、衝撃による故障や事故
を大きく減らせ、寿命を延ばせる。

ロボットの作業範囲や、ロボットそ
のものの動きに合わせて、プロテクター
がないときと全く同じ機能を発揮でき
るよう、採寸してプロテクターの素材
を決めるのが、クロスメディアの営業
マンだ。

いわゆる営業は代理店に任せている。
同社の営業マンは売り込みではなく、

現場を見て「誤差ゼロ」の採寸をして、
初期の取り付けまでを担当する。地方
出張が多くて結構きつい部門だが、吾
妻社長の子息はいま、その仕事をして
いる。

そして子息と若手社員5人が「夢プ
ロジェクトチーム」をつくり、新たな
発展方向を模索している。

「機械に着せる服」を作っている企業
は、いまのところ日本に3社しかない。
発展の可能性を十分に秘めた元気印の
企業だ。(にしはらかつひろ)

株式会社クロスメディア

- 代表取締役社長 吾妻透
- 創業 昭和60年
- 資本金 2800万円
- 社員数 80名
- 売上高 5億9千2百万円(2019年6月期)
- 事業内容 バルブ、装置等の省エネカ
バー「フラインジャケット」の製作・施
工・販売 フッ素樹脂コート省エネカバ
ー「スーパーフラインジャケット」の製作・
施工・販売 産業用ロボットカバー「ロボッ
トプロテクター」の製作・施工・販売
人工衛星用断熱ジャケット「サーマルブ
ランケット」の製作・施工・販売
- 本社 神奈川県相模原市緑区下九沢
1743-1

■ 電話 042-761-4181(代)
■ <http://www.cross-me.co.jp/>

きらぼし銀行 橋本支店会員